

' 85.8月

井深 大 連続対談

好奇心をはぐくむ

村井 潤一（むらい・じゅんいち）

1931年大阪府生まれ。京都大学文学部哲学科卒。発達心理学専攻。文学博士。重症心身障害児施設びわ湖学園で研究主任2年。その後、大阪教育大学教授を経て、82年から奈良女子大学教授。著書に「言語機能の形成と発達」など。

発達 の 3 段階

村井 私が考えておりますのは、子供の発達という場合に、教育ということとからめて考えております。そういう場合に、簡単に言いますと、3段階説みたいなのを考えております。基本のところでは、まず最初に人間というのは非常に好奇心が強い動物である。だから、その好奇心というのをできるだけ自由に発揮させたい。これが基本なんです。赤ちゃんのときはできるだけ好奇心を発揮させたい。

それからもう1つは、人間というのは文化 カルチャーといいますが、我々の先輩が築いたそういういろんなこと、例えばニュートンならニュートンというのを考えますと、ニュートンと同じようなことを考えようと思えますとニュートンと同じくらいの知能がないといかんわけですね。しかし、我々はニュートンから学べているわけですね。それは文字が出て 僕は文字が出てきたというのは情報化時代の始まりだと主張しているわけです。言葉はちょっと汚いですが、他人のふんどしで相撲が取れるようになった。文字が出てきたということは、人が考えたことを利用して仕事ができるようになった。そういうふうに考えておりますが、それを利用して、そして次のステップへ行く。そういうことについての基礎的なことを学習する時期というのが小学校、中学校の時期ではないかと考えています。

そして、それをステップにして、そういうところで学習したことを基盤にして、今度また新しく創造的なことを考える。ですから、そういうふうに考えていきますと、乳幼児期は原則としてできるだけ自由に、その子供の持っている外界に対する接近の仕方、あるいは考え方、取り組みの仕方、これは我々が想像もつかんくらいに赤ちゃんというのはいろんなことを考えている。だから、そういうものをできるだけ認めていこう。

井深 考えているという言葉はちょっと反対ですがね。

村井 反対ですか。いや、僕は考えていると思うんですけどね。非常に考えている。だから、そういう考えをつぶさないというのが乳幼児期の仕事。

井深 私は、感じていると言いかえるんですがね。考えているんじゃないんですよ。だから、それを考えるとしか言えないのが心理学者さんのさがなんでね。

村井 いやいや、そんなことないです。まあ、とにかく考えていると。しかし、考えている、そのままずっと大人までは行けないという考えに立っているわけです。自由な考え方で伸び伸び考えている。そこである時期に、どうしても我々の先祖が築いた文化遺産を学習する時期というのがある。つまり、人の考えですね。自分が考えたことだけではどうしてもいけない。

井深 私と先生との時代はちょっと年代にずれがあるんですよ。年代にずれがある

から、私はファーストステップの間を 3 つのステップぐらいに分けて考えているものだから…わかりました。まず自分で考えて、次は世の中に存在する文化遺産を追及していくと。それで結構ですね。

村井 それを基盤にして、次にまた自分で考える。

井深 その次がね。まず自分で考えて、その次に、その考えのもとに存在する文化遺産を吸収して、それからその後には今度は自分の意思の入ったものにしていくと。これはだから非常に常識的な、今まで考えられていた考え方だろうと思うんですけど、そうじゃないですか、これ。

村井 いや、そうではないと僕は思います。というのは、結局、今の考え方というのは、文化遺産を早くから習得させようとしているわけです。

井深 わかります。今の教育から言えば先生は非常にユニークだけれども、私から言わせりゃ当たり前のことだと。そうなんですね。それでいいですね。

村井 それを当たり前のことが当たり前できないのが今の教育だと。

井深 それはそのとおりです。

古来の子育てを再評価

村井 ですから、当たり前のことが当たり前できない。そこが問題だ。そういうふうに考えています。

そこで赤ちゃんのことに戻りますと、そういう 3 つの柱で考えまして、そうすると、赤ちゃんをできるだけ自由にさせる。そのときに赤ちゃんが考える条件というのはどういう条件が考えられるかということなんですね。そうすると、1つは、日本の古来からの子育てというのをどう評価するかということになりますね。私も心理学で、教育学をやっているわけではないんですが、こういう仕事をしておりますとどうしてもそういう…。

井深 それは入っていったらいいですね。

村井 入っていくのはしょうがないんで入っていきますと、日本というのは子供を非常に大事にした国だと。

井深 大事にね。

村井 非常に大事にした。明治の時期にヨーロッパから入ってきた人々は、日本の子育てについて非常に感動して、子供というのが本当に大切に育てられていると感動したんですね。だから、それをもう1ぺん再確認して、再評価して、そこで母親が精神的に安定して行っている子育ては、原則的には発達心理 私の言う発達心理ですよ、ほかの発達心理は知りませんが、私の発達心理では非常に納得できる。例えば子供と一緒にガラガラを振るとか、子供が「バーバーバ」と言ったら、お母さんも一緒に「バーバーバ」と言う

とか、そういうところは理論的に、私の発達理論からいけば非常に望ましい理論どおりのことができる。

井深 非常によくわかります。

村井 そういうことを考える。だから、逆に言えば、そういうことができにくい状況というものが現代社会にはあると。すなわち、お母さんがお母さんらしく振る舞いにくい…。

井深 ような育児学をつくり上げてしまったんだと。特に戦後の…。

村井 まあ、それはそうかもしれませんけど、それも 1 つですが、非常にそういうことがやりにくい現代社会というのがある。だから一方では、母親が子供に対して教育していることをもう 1 遍…。

井深 わかります。だから、日本の古来から持っていた母親の像というものをもう 1 遍、現代の形で持って再現して 1 つも間違いじゃないのではなかろうかと、そう言っていいますか。

村井 ええ、それは非常に納得できるわけですね。ところが他方では現実があるわけですね。

井深 現実を破りましょうや、これは。

村井 いや、それは破りたいですけども、しかし現実には現実として認めないといかん。

井深 そういう観点での私の意見を申し上げますと、びっくりしたのは、昨年 11 月に何とか協会というところで、日本の道徳の中で何を 1 番大切にしなければいけないかというアンケートをとったら、「親孝行」というのが 73% で第 1 位なんです。それから「恩返し」というのが 52% で第 2 位なんです。

日本の昔の姿のようなものが我々日本人にとっては自然じゃないかしらんと、そういう考え方が少しずつじわじわと出てきているような気がするわけなんです。母親の育児のあり方というのも全くその規範の中での問題点だろうと思うわけなんで、本当に、お産のあり方から全部、このごろは復古的な考えにどんどん行きつつあるわけなんです。そういうような意味でお母さんのあり方というものをもう 1 遍見直さなきゃならないけれども。村井先生の言う現実の壁というのはどんなこと？

母と子をはばむ現実の壁

村井 結婚式に出席されると思うんですけども、そうすると、出席者が、花嫁、花婿に、「お子さんは？」と質問するわけです。すると、しばらくは子供なしで楽しんで、やがてちょっと落ち着いたら子供を産みたいと。しかし、1 人では寂しいから 2 人とか、そういうのがあるわけですね。結局、そういう意味

では子供というのは大人の意味、コントロールによって、産まれたり産まれなかったりするというのが、これは好むと好まざるとにかかわらず、そういう現在。昔は、コウノトリが連れてきたということから始まって、天からの授かりものというふうな感じだったですね。

だから、そういう意味では、産まれてきた子供と大人との関係というのは昔と非常に変わってきたわけです。この科学技術の進歩の中で、それはどうしても認めざるを得ない現実です。

井深 だけど、認めざるを得ないと言っぱなしにすると…。

村井 いや、言っぱなしにしない。それを認めた上で、どうしたらいいかというのが私たちの考え方なんです。それを認めないで、昔はよかったというのはおかしいと。

井深 それはだから、育児というものがすばらしいことであるということが全然伝わってないんですよ。今までの教育学でも、あるいは育児学でも、心の問題というものを、そういうふうにつつんだというような表現というものは一つもしていないんですよ。大体、衛生的、生理的に育つということだけしか対象にしていないので「自分のやっている仕事はこれだけ世の中の役に立っているんだから、それを振り捨てて育児なんか」という言葉が、本当にこれはと思う人から出てくるんですよ。育児の楽しさ、おもしろさよりも苦しさばかり考えて、こんなかけがえのないすばらしいことがあるんだということをうたっていない学者さんに罪があると、私はそう思うんですよ。やっぱり育児というもののすばらしさというものはもっとうたわれなきゃいかん。どうですか？

村井 いや、それはそうと思います。しかし、一方でこれは心理学者と関係ないですよ、心理学者はこういうことを言ってないですから、一方では現実では、例えば今、非常に仕事が込んでいる。だから、子供を産むと、この仕事ができなくなる。だから産もうか産むまいかと考える人がいるというのは現実ですわね。有能な人ほど考えると思うんですよ。子供を産めば、この仕事が続けられなくなる。どうしようかと悩んで、そしてどちらの方を選ぶかは別ですよ。

井深 インカムの半分以下になる人の場合、問題になるわけだね。

村井 しかし、それはそれぞれそういう生きがいもありますし、女性としての生きがいもありますし、それぞれありますから、どうしようかなと考える。そして子供を産むとします。育てているうちに、いいお母さんというのは、やっぱり子供を自分は育てなきゃいかんと考えますね。その最初から、おなかの中から感動するんでなくて、子供と出会ったときから、ずっと育てていくうちに、ああ、やっぱりきちっと育てていかにゃいかん、そういうふうに乗

てきてくれる母親というのが今日、最も望まれる母親なんではないかなと。

井深 だからこれ、授乳の問題が 1 つ重大な問題ですね。つまり、人工乳でいいんだというような考えを植えつけちゃったこと。下手したら、人工乳の方が栄養があって、いいんだということすら言われているし、厚生省の統計によれば、背の高さと体重は 10% 多いんですよ、人工乳の方が。そのかわりにそれが母親としての感動の機会さえも奪うと。だから、それはやっぱり我々の運動としては、おなかへ入ったときから考えましょうやということをやっ
ていかなきゃね。

お母さんが与えた生きる力

村井 戦前の教育を受けたといいますか、戦前の母親というんですか、そのすごさみたいなものは、我々、常に感じますわね。以前それはちょうど僕らが『発達』という雑誌を出しましてやっていたんですが、そのときに河合隼雄さんと河合雅雄さんとに最初に対談してもらったんです。

そのときに河合先生がおっしゃったのは、雅雄さんが結核を患って、生きるか死ぬかというふうな感じになられたんですね。そのときに、もうだめかなと思って、時々目を覚ますんだそうですね。そのときにお母さんはずっと座っていた。目を覚ますとお母さんが座っている、目を覚ますとお母さんが座っている。別に何ということも言わないで、それがものすごく生きる力を与えてくれた。

そういう母親の話を聞きまして、こういうのは昔の母親ですわね。明治の母親、別に学歴はない。そういうことはないけれども、子供のことを非常に考えて、ずっと……。

井深 口には出さないで、心の中ね。

村井 そういうのが非常に子供の力になる。そういう母親というのが僕らの時代になってくるとあこがれですわね、1 つの。しかし、もう求められないんじゃないか。我々の世代がそういう母親像を実現しないと、子供に対してね。

井深 ただ、戦後、やっぱり食えないという問題が、共稼ぎしないとね、非常に現実の問題としてあったわけなんですよ。今、一応、おやじさんの給料で食えるというのが 70% か何か知らんけど、世の中の通常になってきたからには、私はここで考えなきゃならないという気がするんですけどね。

私は『幼児開発』という雑誌をこさえたときにすぐに思ったのは、しまったと。幼児開発じゃないんだ、母親開発だという、そういう気がそのときすぐに、つくって 1 年もたたないうちにそういうことを言い出したことがあるんだけど 理想的な母親像 そういうものをお母さんたちに紹介すること、

いいですね。

村井 いいですね、こういう人がいると。昔の母親という中には、例えば学歴とかそういうのと無関係にね、ということは逆に言えば、だれでもなれるということですね。学歴とは無関係にそういうことがあるんだということですね。そういう人たちのそういう例を紹介する、これは非常にいいことだと思うんですけども。

井深 非常に難しいですね、でもね。

村井 難しいと思います。

井深 自分でそれをあらわにしようとしらない人なんですね、大体においてね。本当のいいお母さんというのはね。だから、なかなかそういう記録もないしね。

村井 また、そういうエピソードをいっぱい集めることは大事ですね。

井深 うん。集めて、どういうお母さんが本当にね、妊娠したらお母さんというのはどういう気持ちを持ってもらうべきかと、そこら辺のノウハウというのはつくり出して、表現していかなきゃ、ただお母さんに訴えるといっても、何を訴えるのかということをね。今日は非常にいいことを教えていただいてね。

赤ちゃんは考えている？

村井 また話は変わりますけれども、胎児のところ、先ほどちょっと井深先生から疑問があって、赤ん坊も考えているということについて疑問があるとおっしゃられたんですが、私も最初のころは、赤ん坊なんてとても考えていないと思っていました。しかし、ピアジェの本を読んで、いろんな本を読んでいる中で、赤ん坊というのは案外考えていると。例えばピアジェの観察にもございますけど、物を落とすと、拾って、また落とす、こういうことを繰り返している。しかし、14、5カ月ぐらいになると、赤ちゃんというのは落とす位置を変えているというんです。高いところから落としたり、低いところから落としたり、いろんなところへ落としているというんです。ということは、大げさに言えば、物はどう落ちるかを研究しているわけです。

井深 ふいふいふ…。

村井 いや、それは研究している。

井深 何カ月ですか、それは。

村井 15、6カ月で。

井深 15、6カ月になりゃあ、私は考えるということを否定しません。

村井 いやいや、それはもっと前から考えているんですが、そこが非常におもしろい考え方をやっている。そこで非常に大事なことは、考えている内容とか、そういうことでなくて、自分で問題をつくっているわけです。今までいるん

なことは皆、問題が与えられて、それを解答するというのは非常にうまいですね。ところが赤ちゃんは、割合に自分で、これはどうなるかという問題をつくっている。我々、昔の心理学では、自分で問題をつくるのは非常に高級な人で、学者のようなとんでもない偉い人で、ほかの人は皆、問題を与えられて、それを解答するのに精いっぱいであったというふうなのが言われていたわけです。

ところがそうではないと。小さいころの子供は案外に自分で問題をつくっています。私も最初、ピアジェの本を読んだとき、本当かなと思ったんですけど。

井深 いや、ピアジェの評価するところは、彼自身の子供の教育だけですよ、私が評価するのは。

村井 それはそれとして、最初そう思ったんですけど、それでいろいろ私がやってみました。すると、ピアジェさんのお子さんじゃなくても、皆やっている。それを見ないのは我々の観察力の不足なんです、はっきり言えばね。みんな割と子供は考えているんですよ。ところが、考えていないというふうに我々の大人の考え方で見ているから、何か物を落としておると。くだらんことをしてるやないかと。

井深 いや、私は胎児から、非常に高度のものはあるかもしれないけれども、考えているという言葉には私は非常に……。超能力的なものは持っているかもしれないだろうと。それは絶対否定しないけれども、それを考えによってどうこうというのは……。

村井 まあ、とにかく、外からの刺激に対して、それなりに動いているんじゃないか。自分が主体として周りの世界に働きかけているということとっていただいたらいいと思いますけどね。

1つ非常に大事なことは、自分で問題をつくっているわけです。これを大事に育てようと。自分で問題をつくる力を大事に育てたいと。それが僕らの考え方で……。

井深 じゃあ、私の意見を言いましょうか。私は、遺伝というものを、特に知能であるとか、性格であるとかというものが遺伝するということは、100%と言いたいたいんだけど、100%ではちょっと大げさ過ぎるから、まあ95%ぐらい遺伝しない、それが私の気持ちなんですよ。

そうすると、性格というものは何で起きるかという、大体、私は好き嫌いということから発生するんだと思う。

好きということはどうして発生するかという、繰り返しかけですね。毎日それを繰り返して、パターン、あえてこれ考えない、判断しないでパターンを繰り返していると、何でも好きになる。身についちゃうわけなんです

ね。

性格であろうが、道徳であろうが、全部パターンの繰り返しによってその人が1番好きになるんだ。そのときに、意味というものは絶対に追求しちゃいけない。これはまたちょっと意味があるんですけども、丸暗記ということと理屈を考えて覚えるというのは、一応、言葉はないですから記憶としますと、丸暗記と記憶というものを今ごっちゃにしているのが世界じゅうの教育の悲劇だと、私はそう言いたいんですね。

村井 丸暗記をどう位置づけるかというのは、僕らに言わしたら発達なんですね。また非常に大きい位置を占めると思いますね。

それで、今まで丸暗記というのは、ある面で否定されたり……。

井深 罪悪視しているね、文部省なんてのは、今。

村井 私は必ずしもそうは思っていないんですね。

井深 だけど、それをごっちゃにして、丸暗記の部分だっていっぱいあるわけですよ。

村井 それはありますよ。

井深 今の幼稚園から大学までを含めてね。

村井 そこに井深先生のユニークさがあるということですね、下に下げると。僕らは最初に、まず子供というのは考える力を持っている。だから、考えがある。

井深 それは認めますね。

村井 それで、その次に丸暗記……。

井深 1歳3カ月という……。その次に暗記しようというのが、それはもっと早くにしなきゃうそだろうというのが私の持っている……。

村井 我々はそこがちょっと違いますけれども、私は、ある時期は丸暗記というのはどうしても必要だと、考えているわけですね。理屈で覚えていくには余りにもたくさんのことを覚えなくちゃならないのね。そして、丸暗記をすることによって後でわかってくるということがあるんですね。後で理屈がついてくるということがありますからね。

井深 いや、それでね、芸術でも、自分で意味を発見しなきゃうそだと、教育というのはそういうものだろうと思う。エレメントだけたくさん入れておいてもらって、それで自分で、化学方程式って、ああ、こういうことかというのは、何年後になるかわからないけれども、それでいいだろうというのが私の発想なんですけどもね。飛躍し過ぎているかもしれないけれども。

知識よりも知恵を

村井 私なんか割と子育てに関しては、井深先生におしかりを受けるかもしれませ

んが、保守的でした、結局、長い歴史の中で淘汰されてきているという方法があったんだけど、ある程度ね。そういうふうを考えるわけですね。

だから、僕は常に幼稚園の先生なんかに言うんですけども、幼稚園に行った子は幼児教育を受けた子、行っていない子供は教育を受けていない子供ということ言うわけですね。僕はおかしいと思う。要するに言葉というものを正確に使うのに、幼稚園で教育を受けた子供と家庭で教育を受けた子供とでどちらがいい子供に育つのか。一方は教育を受けた子供、一方は教育を受けない子供というのは、それはちょっと僭越でね、やっぱり言葉というのは厳密に使うと、きちっとした議論ができると、そういうふう考えるんです。

井深 幼稚園というよりも、幼稚園の先生がだれであったか、どんな先生であったかということの方が問題であって、幼稚園に行ったか行かないかというのは…。何か、結論的なことを1つ、私への反論でも何でも…。

村井 先ほど申しましたように、子育てに対しては割合保守的といいますか、そんな考え方で、今、申しましたように、子供というのは、人間というのは割と自分で物考える力を持っているんですよ、非常に好奇心が強いんです。だから、とりあえず、それはつぶさないようにしたい、3、4歳になるまではね。今の社会というのはそれをつぶすような状況がかなりあるんじゃないかと思う。だから…。

井深 特に幼児教育ということでつぶすことが嫌だという。

村井 ええ。つぶさないようにするというのとはどういうことかということ、お母さんが子供と自然にかかわる状況というのは、本来つぶさない状況なんだと、そういうふう考えますね。

しかし、そのままですつといけるかといったら、少なくとも今日の社会では逆になっている。ある時期に少々辛くても、嫌でも勉強してもらわないといけないという動きがあると。しかし、そのときにそれを支えるのは、子供のときに大事に育てられてきたということで、学ぶということに対する好奇心ですね、そういうことがつぶされていない。それから公平な競争、それからそういう学ぶということをもみんな認めてくれる家庭環境ですね。そのまま大人の目から見てもつまらぬと思うようなことでもいろいろ考えたことを、みんなそれを認めてくれる、そういうある種の辛さみたいなものに耐えさせる。それで、そこを越えると、今度はそれを基幹にして次の大学に行ってしっかり、総合的なものを考えていく。

井深 私は、それ、とつても考えられないんですよ。例えば、6歳までにエレメントとして、パターンとして英語がすっかり入っちゃう、高等数学まで入っちゃう、3けたの掛け算なんていうのもパツと出てくる、パターンとしてですよ。

そういう能力を持ってどんどん、字は読めるんだと。そういう人になったときに、今の教育というものが何をやるだろうかという、言葉から始まったいろんな早教育の人たちは、みんなそれで参っちゃっているんですね。

中学校に行っただけでも、あほらしくて何もやることがないから、そのかわり、早教育をやった人は非常に幅が広くなっちゃって、法学者であっても、生理から、植物から、芸術から、すべてカバーするような広い読書から始まって、そういうものを獲得するような幅の広い人になっているんだけど、今の教育制度の中では、おさまらないだろうと。

村井 日本の教育というのは知と情を対比させるわけですね。情的な教育を主張すると、あなたは知的教育を否定するのと言うのね。それで、知的な教育をすると情を否定するなんて、僕らはそうじゃないと言うんですね。

少なくとも幼児期では、知と情が一致したような形で教育されることが本当の意味での…。

井深 もう1つ、体育も。

村井 ええ、そうですね。そういうものが本当の意味の知で、その頭をどう使うかというところが余り言われていないですね。

井深 だから、知育とか、徳育とか、それを分けるのがおかしい。だけど、これは日本の教育の仕組みが、明治維新からの仕組みがどうしても知的偏重になっちゃって、それから戦後ますますそれがひどくなったんですね。知的とか、何とかをやるよりは、もう1つ、心の問題というところ、あるいは感性、感じる力というものを、どうなくさないで育てていくかということの方が重要問題だと思うんですが。

村井 だから、何か、知的と言うと、日本では非常に冷たいという感じを持たれることが多いんですね。本来、知的というのは必ずしもそうじゃなくて、いろんな、老人問題とか、そういう問題をひっくるめてどうしたらいいかと考えるのが知的な問題だという部分があるわけですね。どういうふうにシステムをつくっていくかというような、やっぱり知的にきっちり考えられる人が考えていかないと…。

井深 知的と言うから…知恵と知識ですよ。

村井 だから、本当に大切なのは知恵ですね。

井深 知識偏重なくせに丸暗記というのは否定するんだから（笑い）。

おわり